まち・ひと・しごと新聞

第4号
発行
三島信用金庫
駿東郡長泉下土狩96-3
055-973-5730
制作
県立韮山高等学校写真報道部
日本大学三島高等学校新聞部
県立熱海高等学校報道部
県立沼津東高等学校新聞部
協力
静岡県東部地域局

運輸業　航空機産業

世界に誇れる安全を

株式会社エステックでは航空機のエンジン部品の製造業、伊豆箱根鉄道株式会社では運輸業を通して、世界や地域に安全性の高い製品や運輸サービスを提供している。

伊豆箱根鉄道（株）高杉さん　芹澤さん

「安心安全な地域の足に」

伊豆箱根鉄道株式会社は、運輸業や観光業など、幅広い分野で地域の活性化やPRに貢献している。

安全を第一に

運輸業は電車を止めないことを大切にしています。一刻も早く安心安全な地域の足になりたいという思いです。また、事業は安全の上に成り立つという考えから、運輸安全推進委員会という安全に関する会議を毎月行っています。

沿線市町と連携した駿豆線沿線地域活性化協議会も活動中で、観光・防犯・防災の3つの部会から沿線地域の活性化を図ります。中でも防災部会は、実際に電車を緊急停止させる訓練を年に1回実施して安全性のアピールも行います。

地域と連携を

昭和33年の狩野川台風で甚大な被害を受けましたが、12日間で復旧させることができました。この短期間での復旧は、地域の方の協力がなければ考えられないことでした。地域社会の発展に貢献することが目標なので、これからも一緒に歩んでいきたいです。

また伊豆半島の観光資源には、大きなチャンスがあります。伊豆・三津シーパラダイスなどの観光施設だけでアピールなず、ジオパークや韮山反射炉などの観光地が近辺にあると伝えることで、お客様の周遊促進を狙っています。これからも企業や地域との連携を強化し、より多くの方に伊豆半島に来ていただきたいです。

▲高杉さん（左）と芹澤さん（右）と記者

（株）エステック　鈴木誠一社長

国際認証取得の航空宇宙産業

▲真剣な眼差しで語る株式会社エステック　鈴木誠一社長

株式会社エステックは、航空機のエンジン部品や建設機械などの高難度の部品を製造している。取得が難しいと言われている航空宇宙産業の国際認証を取得している県内唯一の中小企業で、世界トップレベルの技術力を有している。

繊細な航空機部品

鈴木社長から自動車部品と航空機部品の違いを聞いた。例えば部品数は、自動車の場合約2万パーツだが、航空機の場合は約300パーツでおよそ150倍だという。また航空機の部品は、自動車の部品と違って角の丸みにも寸法が決められている。エステックでは光学顕微鏡を用いて寸法を測定したり、蛍光性の液体を用いた特殊な検査を行ったりしている。また航空機部品は溶接せず、1つの金属から部品を削り出すため加工が難しい。繊細な航空機部品を製造するために、徹底した品質管理や設備の点検が欠かせないという。

「困った時のエステック」

航空機の部品は、部品数が多かったり、すべての部品に寸法が決まっていたりするので製造することがとても難しいです。私たちはその航空機産業に30年以上のキャリアがあり、県内中小企業で唯一「Nadcap」という国際認証を有しており、他社からも一目置かれる存在です。大手企業でも音を上げてしまった、難しいレベルの部品も基本引き受けるスタンスから「困った時のエステック」といわれています。大手企業に勝てる技術が都心ではなく、県東部にあることは、とても魅力的なことだと思います。

▲作業前の設備点検は欠かせない

強みは高い技術力

私たちの強みは高い技術力があるため、全工程が自分たちでできることです。ある特定の部品だけでなく、様々な部品と関わり常に一人ひとりが責任を持つようにしています。そのため、部品の情報共有や、部署の隔てのないコミュニケーションが欠かせません。技術力の向上には独自で製造したり、工夫を凝らすなどの努力を続けたりすることが大事だと考えているからです。また、常に素直でいることを心がけています。仲間のアドバイスを素直に聞き入れる人ほど、よく伸びます。

地元で経験活かす

学生の時は勉強したり、留学などの経験をしたりすることが一番大事なことだと思います。そして将来、学生時代に得たそれらの知識や経験を繋げて役立たせるかが重要です。若い時に都会で様々な経験をして、後に地元に帰ってきて、その経験を活かしてほしいです。また、途中で「限界だ」と感じることがあると思いますが、そこで諦めず努力を続けてください。限界を決めずにチャレンジし続けてください。

編集後記

取材をさせていただいた企業の方々をはじめ、三島信用金庫の担当者の方との協力を得て、紙面製作ができました。この場をお借りして、お礼申し上げます。まだまだ未熟な点も多いですが、地元企業の様々な魅力を知っていただけたら幸いです。

【一面担当】
県立韮山高校
写真報道部

韮山高校写真報道部員

地域に愛されるスーパー～カドイケ～

静岡県東部では誰もが知るスーパーカドイケを展開している株式会社カドイケ。その企業理念や地域とのかかわりについて、本部取締役の酒井智さんと管理部本部長の稲葉隆利さんに話を聞いた。

「丁寧さと安全を」

想いを込めた品物

株式会社カドイケの企業理念は「正直な商売、安心・安全な商品を適正な価格で販売する」である。企業理念への思いについて酒井さんは「来店して頂いたお客さまにがっかりして欲しくない。そのため、月間イベントカレンダーのチラシを作っている。その日その日のお得な商品をあらかじめ知らせ、お客さまに後悔しない買い物をしていただけるよう心掛けている」と語った。またカドイケの強みについては「青果・鮮魚・精肉のような生鮮食品に特化している点だ。生鮮食品は、他の店と大きく差がつく。そのため、仕入時に社員が市場へ行って、目で見て質の良い商品を選別する。毎日、新鮮でおいしい食品をお客さまにお届けしたい」と話した。カドイケでは、お客さまのために、お得な仕組みと質の良い商品を提供する努力をしている。

お客様への想いを熱く語る酒井さん

食事を愉しく

スーパーカドイケ清水町徳倉店は、二〇〇二年に創立し、今年で十七年目。店舗に訪れるお客さまは、昔から知っている人も多く、地域の方とのつながりが強いのがカドイケの特徴だ。そのため、スーパーではあるけれども「昔の商店街」のような、親しみやすい明るい場所となっている。

酒井さんは、このような地域の方とのつながりについて「お客さまとのコミュニケーションをとることで、正確なニーズに応えることができる」と話した。

カドイケでは、地域のお客さまのニーズをしっかり把握し、旬の食材を提供し『食の愉しさ』を届けることを心掛けている。

お客さまとの交流を大切に

今、スーパーや小売店では、セルフレジの導入が次々とされている。しかし、スーパーカドイケはセルフレジを導入していない。

時代に逆らってでも導入しない理由について、酒井さんは「店内にスタッフがいなければ、お客さまとの会話が生まれない。お客さまとコミュニケーションをとることで、機械ではできない些細なことに気づき、店舗をより良くできる。今のような形でこれからもやっていきたい」と語った。さらに、稲葉さんは「どんな時代でも自分が楽しく仕事をしていれば、お客さまにも伝わる。そのため、自由と楽しさを大切にし、自然体で正直に働くことを意識している」と、古き良きスタイルを貫くカドイケでの仕事の楽しさを語った。

カドイケ清水町徳倉店に訪れた日大三島新聞部

常に和の心をもってウェルネスケア

株式会社六月開業ウェルネスケア（沼津市）は、福祉事業を中心に、介護職の人材不足を考える。

介護の魅力を発信

いづテラスは、十人一つのグループになり、合わせて七十人の高齢者の方々が共同生活を送っている。施設は、どこにいてもコミュニケーションのとりやすい空間となっている。

いづテラスの外観

施設長を務める本田洋美さんに仕事のやりがいについて聞くと「介護の仕事は、利用される一人ひとりの心身の状態を確認し、何を一番望んでいるのかを理解することが大切。そして、『助かったよ』と言われた時にやりがいを感じる」と話した。

ウェルネスケアグループの目標は「常に和の心を持つこと」だ。統括部長の芹澤美佐子さんは「『和』という言葉にはゆったり、まったりという意味が込められている。施設を利用されている方々にとっては本当の家ではないが、当たり前の日常が流れるように工夫し、自分の家にいるように感じてもらいたい」と語った。加えて「一人ひとりが感情を自然に出せる施設を目指している」と施設の目標も話した。

職員の方々とマスコットのテラスちゃんと共に

人材不足を考える

介護職は三六五日・二四時間、一分も空けられない職業のため、利用者と職員の信頼関係を構築することが大切である。そこで、介護職を目指す学生に向けて、理事長の加藤信秀さんは「メディアの影響で、介護職はネガティブなイメージが強いが、現場の職員たちは皆、やりがいを持っている。少しでも興味があるなら、介護の世界を知ってもらいたい」と語った。昨今、介護職の人手は不足している。例として、都内では、人材不足により約六〇〇〇もの部屋が空いているのに、利用することができない状態だ。そのため、ウェルネスケアでは、ベトナムからの実習生を受け入れるなどして、介護職に就く人材を増やす手助けもしている。この介護職の人材不足は、社会全体で考えるべき課題と言える。

介護職を語る加藤理事長と芹澤統括部長

編集後記

今回二面を担当した、日本大学三島高等学校新聞部です。地域で輝く企業さまを取材させていただけたのはとても楽しかったです。

カドイケさまには地域の方々に愛される秘訣を、ウェルネスケアさまには仕事へのこだわりを教えてもらいました。

未熟な記事ではありますが、ご一読いただければ幸いです。

日大三島新聞部集合写真

伊豆急行株式会社

伊豆の観光を「足元」から支える

伊東～伊豆急下田間まで45．7㎞の鉄道を経営する伊豆急行は、今年で59周年を迎える。社是「伊豆とともに生きる」の通り、伊豆の発展と歩みを共にする。豪華な新車両「THE ROYAL EXPRESS」関連企画を中心となって進めた、企画部長の鈴木孝明氏に話を伺った。

線路をバックに語る鈴木氏

創業は前身である「伊東下田電気鉄道」が、地域活性化を目的として会社を設立したところから始まる。その後、「伊豆急行」に商号変更、リゾート地分譲などの不動産事業、水道事業などへと事業拡大を行いながら現在に至る。社是は黎明期の社長であった五島昇の「伊豆急は伊豆と共に生きる」という会社の目指す方向性を語った言葉からとる。伊豆の人々に生かされる会社と認識し、それゆえ伊豆の人々に色々な貢献をするという共生関係を表し、先進的なサービスの提供、サービスの改善への努力など、変わりつづける時代に合わせ地域とともに会社を進化させてきた。

多様な業務

「運賃収入の75％が切符、つまり観光客の乗車によるもの。だからこそ、観光客にいかに来てもらうかを考えることは本当に楽しい」と述べる鈴木氏は、収支計画や目標づくりなど会社の方向性の舵を取る企画部の所属。このほかに路線の三分の一をトンネルが占める山と海沿いを走る路線の保守から運行を担う運輸部、営業や観光企画を進める観光推進部の3つの部局が協力して会社が成り立つ。

社是の前で鈴木氏と記念撮影

「鉄道会社として最も大切なことは『安全と安心』。この上にいかに快適で楽しい価値を提供できるかが問われている」と鈴木氏は語る。直近では観光型MaaS（デジタルフリーパス）の試験的導入を日本の私鉄で初めて行ったことや、バケーションオフィス（観光先で利用できるレンタルオフィス）の開設など、会社として常に新しいことにチャレンジし続けている。

問われるのは「対応力」

働きやすい職場へ

社内では、社員がより良い職場環境で働けるように促進しており、協調性をもって仕事ができるよう「ほめる文化」をつくる実践をしている。社員が何かよいことをすると「サンキューカード」というものに感謝の言葉を記載する。そのカードはコピー機を置く部屋など比較的人の目に付きやすいところに掲示されて、より社員の仲を深め、楽しく働けるような環境を作る役割を果たしている。同僚のいいところを探して褒め、その褒めた人も併せて表彰されるという仕組みだ。他にも時差出勤、ウォークビズ（歩きやすい服装で出勤することを勧め、健康増進を図る）、立ちながら仕事ができるようなデスクの導入など、環境整備に力を入れている。

高校生に思うこと

昨今の高校生には、総じておとなしい印象を持っているとのことであった。実際業務をしていく上では「想定していたことから外れる事象が生じることが、働いていく際には当然ある。その時にいかに対応するか、対応力が問われる」、だからこそ「大人に物おじしないで応対出来るよう、社会との繋がりを若いうちから持ってほしい」。

「若い人たちが元気に働けるよう、行政等と協力して伊豆を盛り上げ、雇用を増やしていきたい」、そうすることで地域に貢献して行きたいと語った。

ホテルニューアカオ

熱海の「豊かな自然と絶景」でお出迎え

熱海駅から南の海沿いにある、錦ヶ浦の絶景をウリとする「ホテルニューアカオ」（以下、アカオ）。全室オーシャンビューのこのホテルには、年間で約20万人も！来客する。その魅力に迫るため、社長の赤尾宣長氏と業務改善室シニアエキスパートの植松司氏にインタビューを敢行した。

赤尾氏を熱海市街を見下ろせるテラスでパチリ

アカオの創業は1965年。熱海駅前の旅館からスタートし、海などの自然を楽しんでもらうために駅から少し離れた錦ヶ浦でホテルを開設するに至る。

アカオはホテルだけではない。広大な敷地内に、2つのホテル、「ハーブ&ローズガーデン」、ビーチの4施設が点在し、全体で「アカオリゾート公園」をなす。ガーデンには隈研吾氏がデザインしたカフェ「COEDA HOUSE」をはじめインスタ映えするスポットが目白押し。まさに熱海を代表する観光名所だ。

インタビューに答える赤尾氏

アカオがめざすもの

社是は「愛と創造」だ。「愛とはお客様に喜びを、社員に幸せを提供すること、創造とは今までにない価値を創るということ」（赤尾氏）。昭和レトロ感がただよう熱海市街地から離れた自然豊かな景勝地に南仏をイメージしたホテルをつくることで、他とは差別化した魅力を醸す。

「社員が連携して仕事をしている時と、お客様が喜ぶ瞬間を見た時に、強いやりがいを感じる」（赤尾氏）。通常時だけでなく、台風襲来などの非常時でも皆が一丸となって機敏に動き被害を最小限に収めた際なども、社員同士の強い連帯感を感じるという。植松氏は後進の育成で「まずは目標とする先輩を見つけなさい」とアドバイスをする。そのことで、業務や目標が見えてくるという。互いの仕事に敬意を持って見合う。アカオが持つ連帯感を強める要因だ。

今後の課題については「訪れる外国人が来客全体の5％程度。今後はアジア圏などのインバウンドを増やすことで熱海を盛り上げていきたい」（赤尾氏）と語る。参考にするために研修として社員を海外のホテルに派遣する（去年はバリ島に派遣）。結果として社員スキルを上げるための教育につながる。

取材当日は全施設が休館であった。正月等の繁忙期の後に、年10日ほどの休館日を設けている。社員にはこの間に休んでもらうなど、会社をあげてリフレッシュに努める。

社員のやる気や連帯感の醸成が、アカオの成功の鍵であると感じた。

編集後記

インタビューを通じて、チャレンジする大切さと、顧客に対し真摯に向き合う大事さを学ぶことができた。ありがとうございました。

（熱海高校報道部）

独自性あふれるホテルに ココチホテル沼津

沼津駅北口を出てすぐ、左側に見るおしゃれな建物が「ココチホテル沼津」だ。

このココチホテルの客室の床は畳張りになっている。この理由について社長の大嶽龍太郎さんは「ホテルのコンセプトとして、日本の心地よさを味わえるホテルにしたいと考えていました」と話した。

▶社長の大嶽さん

「古い・ありがち」から「魅力的に」

沼津駅周辺には、様々なビジネスホテルが建ち並ぶが、ココチホテルはどのように差別化を図っているのか。

畳敷きの部屋の他にも、デザイナーズルームやビジネスルームなどを用意し、様々な宿泊者のニーズに答えている。

また、朝食の炭火で焼かれたアジの干物食べ放題は、宿泊客から好評を受けている。朝食に力を入れる理由について大嶽さんは「以前、父が経営していたホテルはこれといった特徴がありませんでした。そこで、胃袋に直接訴えることで特徴づけられると考えました」と語った。

このようにココチホテルは、他のビジネスホテルにはない魅力を取り入れたことで宿泊者から人気を博し、今では宿泊者の内約三割が観光客となっている。今後の目標として、インバウンドの外国人観光客増加を掲げ、史なる客層の獲得を目指すそうだ。

地域見直す交流の場として

ホテルニューオータケが経営するもう一つのホテル「コナステイ伊豆長岡」は、コミュニティーに重きを置いている。

一階は地域の公共スペースで、観光客や地域の方の交流の場の役割を担っている。

大嶽さんは「観光客との交流により地域の方に地域の良さを見直してもらいたいです」と話した。

▲自由に使えるシェアキッチンも完備

▼ゆったり休めるロビー

▲電動アシスト自転車「eバイク」

日本で唯一 自転車ホテル

コナステイ最大の特徴は、サイクリングに特化したホテルであることだ。

このホテルでは「自転車×地域の魅力×企画力」をモットーに、利用客が電動自転車（eバイク）を借りてガイド付きの八つのサイクリングコースで伊豆を旅することができる。

また、客室のマイバイクを置けるスペースや世界のコースを走れるシミュレーターなどの室内設備も整っている。

大嶽さんは「更に多くの人に自転車の魅力を知ってもらいたいです」と語った。

今号では、静岡県東部に2つの宿泊施設を構えるホテルニューオータケと、医療機器の精密部品を製造する東海部品工業を取材した。

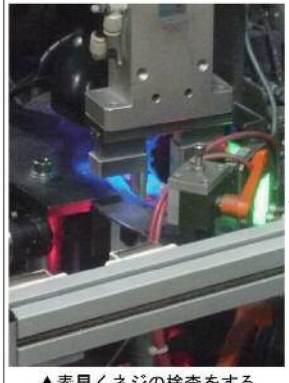
将来を見据えたものづくり

東海部品工業株式会社は1947年に開業された、ネジ部品や医療機器などを製造する会社だ。

製造しているネジについて専務取締役の伊藤泰之さんは「本社である沼津工場では自動車用のネジを、天城工場では医療用のネジやマイクロネジという小さなネジを作っています」と話した。マイクロネジを作り始めたのは1999年。それまでは自動車関連部品のみを作っていたが、それだけでは技術革新の激しい時代に対応できないと考え、マイクロネジ事業部を開設した。

試行錯誤を重ね、それまで培ってきたネジの加工技術を生かすことで完成に漕ぎ着けた。こうして作られたマイクロネジは主にハードディスクドライブやラジコン、模型などに使われている。

また、東海部品工業株式会社は農業事業も行っている。一見関係のない農業事業をなぜ始めたのかを聞くと「ものづくりには観察力や好奇心、持久力が必要です。これらを学べるのが農業だと考えました」と語った。


▲素早くネジの検査をする

▲会社について語る

企業は挑戦で日々発展する

東海部品工業株式会社の主要な事業の一つに医療機器事業がある。外国製の商品が多くを占める医療機器分野で日本人の骨格に合うことを特徴とした製品を数多く作っている。

もともとこの事業は社長の友人の医師に医療機器用ネジの開発を頼まれ始めたそうだ。しかし、最初は日本のどの企業も加工技術がないため、一から加工方法を考えなければならず上手くいかなかった。更に、医療機器への規制は厳しく、挑戦と失敗を繰り返し、チタン製インプラント用ネジを開発するまで八年間かかったそうだ。

医療機器事業で培った技術を電気自動車用のネジの制作に役立てるなど、新たな挑戦によってこれまでの事業を更に発展させる。そのような姿勢が変化する世界に対応する企業を作り上げている。

自社の魅力について取締役の盛田勇気さんは「中小企業でリソースが少ないので、全て自分でやる必要があり、難しさはありますが、自分で世界を創ることができます」と語った。

編集後記

今回、取材させていただいたホテルニューオータケは宿泊者の心地よさを追求し、東海部品は型にはまらない発想と技術力の追求をしていました。地元企業のこうした追求が地域の魅力につながると実感しました。ご協力いただいた皆様に感謝致します。

【担当】沼津東高校新聞部

『まち・ひと・しごと新聞』とは

「まち・ひと・しごと新聞」は、静岡県東部地域局の委託の下、地元の高校生が地元企業を取材、記事を制作し、静岡県東部・伊豆地域の高校・自治体等に配布をしている新聞です。高校生に地元の企業や産業、文化への理解を深めてもらい、近い将来、就職を考える際に『地元への就職』を考えるきっかけになることを期待し、年一回発行しています。